

黒田清輝日記

第一卷

黑田清輝日記

第一卷



中央公論美術出版

黑田清輝日記 第一卷 ㊟

昭和四十一年七月十五日印刷
昭和四十一年七月二十五日發行

限定壹千部之內
本書共七人番

定價貳千七百圓

著者 黑田清輝
發行者 栗本和夫
活版印刷 三陽社
寫真版印刷 同美印刷
用紙 三菱製紙株式會社
製本所 協和製本株式會社

中央公論美術出版

東京都中央區京橋二丁目一番地
振替口座 東京六三三六番

製函 美濃羽製函所

目次

はしがき		隈元謙次郎	一
凡例			三
明治十七年			五
明治十八年			三四
明治十九年			五四
明治二十年			七四
明治二十一年			二六
明治二十二年			一四
明治二十三年			一六
明治二十四年			一九

明治二十五年……………三四

明治二十六年……………三一

はしがき

黒田清輝は、明治十七年数え年十九歳の時フランスに留學し、はじめ法律學を學んだが、間もなく洋畫の研究に轉じ、「讀書」や「朝散」などをサロンに出品して認められ、明治二十六年二十九歳の時歸國した。

日清戰役を経過してわが國は、文化の上昇期に際會し、彼は東京美術學校に新設された西洋畫科の初代教授に起用され、また白馬會を結成して新畫風の普及につとめ、わが國の美術や文化に大きな刺戟を與えた。

その後、文部省美術展覽會の開設に盡力し、自らも多くのすぐれた作品を發表して帝室技藝員に推された。晩年には、帝國美術院々長、貴族院議員、あるいは國民美術協會々頭、日本工藝協會總裁、印度支那協會々長、宮内省御用掛、外務省情報部囑託など多くの顯職に就いて、きわめて廣汎な文化活動をなし、大正十三年五十九歳で歿した。

このように、その生涯は多彩であり、繁忙のうちに日々を送ったが、青年時代から日記や書簡によって日常の生活記録を精細に書きとどめている。これらは、黒田自身の重要な傳記資料であると同時に、わが近代文化史の資料としても看過できないものである。そこで、特に黒田家の諒解を得てこの「黒田清輝日記」を編集し、三卷に収めて上梓することとした。

第一卷には、明治十七年（一八八四）から同二十六年（一八九三）にわたる約十年間の滯歐中の日記や旅行記に、

東京の両親へ宛てて送った書簡を抜萃して加えた。これらは、彼が法律學から畫學の研究へ轉じたころの苦惱、つづいてコラン教室やルーヴル博物館でのひたむきな研鑽、さらにパリ近郊のグレー村へ移って「讀書」など數の作品をえがいた三年間の日々の生活、さらに歸國を前にしてのパリでの「朝妝」の製作過程などをよく傳えている。また、三回のオランダ、ベルギー旅行、二回のブレハ島旅行や獨佛國境旅行の記録も興味深いものがある。しかも、この間に、當時のパリ在留の原敬をはじめ多くの外交官や美術家、あるいはパリを訪れた日本人などの動靜を窺うことが出来る。

第二卷には、明治二十六年歸國後の活動、すなわち、天真道場の創立、日清戰役從軍、京都での第四回内國勸業博覽會や「昔語り」の製作、東京美術學校西洋畫科の新設、白馬會の結成、第二回の渡歐とイタリア旅行、文展での活動など、明治末年までの記録を収める。

第三卷には、大正期の文、帝展での活動、國民美術協會の結成、貴族院議員などとしての活動の記録を収める。なお、この第三卷には、年譜、索引などを附載し、また別に全卷にわたる解説を加える豫定である。

昭和四十一年六月

隈元謙次郎

凡例

- 一 日記・旅行記は、ほとんど全文を収録したが、書簡は美術に關係あるものを選択し、しかも相當の省略を試みた。
- 一 日記と書簡は、日附の順序に従って配列した。
- 一 文章は、すべて原形のままとしたが、原文にはほとんど句讀點がないので、便宜句點を一字あきとして読みやすくした。
- 一 人名・地名などに限り明らかな誤りは訂正した。

明治十七年（一八八四）

二月九日（香港日記）

九日午後四時過ギ同行橋口氏ト墓見物ニ出掛ク 道ヲ知ラザルヲ以テ旅宿ヨリ駕籠ニ乗ジテ行ク 左方ニ進ム 然ルニ此方ハ右方ノ雜沓トハカハリ仙境ニ入ルガ如キ所アリ 又文明國ニ遊ビシガ如キアリ 壯快ナル家屋アリ 運動場アリ 競馬場アリ 其間ニ軍人等相携ヘテ歩行ス 又本日ハ土曜日ナル故力運動場ニ於テ衆人戲遊ス 樂隊ハ樂ヲ奏ス 實ニ心自愉快ナリ 山ヲ見レバ遠方カラ見シトハカハリ岩石起伏ノ有様畫ケルガ如シ 山頂ハ植木無シ 麓ニ近ツクニ從ヒ樹生ス 麓ニ松樹多シ 併シ甚タ大ナル者ヲ見ス 却說橋口氏ト駕籠ニテ行ク 道路平坦也 而一本道也 路傍樹有リ 之ヲ見レバ枝多クシテ繁ル 而葉ハ紳ノ葉ノ如クニシテ小ナリ 根ハ四方八方ニマタガリ網ヲ張りシガ如シ 又枝ヨリ根ヲタル其長サ一間餘ニ至ルモノ有リ 此木ハ生等ノ旅宿ノ邊ヨリ左方ノ路傍ニ植エタリ 右方ノ市街ニハ樹木ヲ見ズ 少シク進ミ行ケバ小坂アリ 登リ又下ル所ナリ 此ノ坂ヲ下リ右折シテ二三丁行ケバ競馬場ナリ 此邊四方山ニシテ景色美ナリ 諸此ノ競馬場ノ屏ワキニ竹ヲ植エタリ 是則鹿兒島ノ金竹ナリ 而鹿兒島ノ垣ナドニセシモノニ比スレバ至大也 又此ノ所ニハ小屋多ク作り居タリ 是レ競馬ヲ見ルサジキト推察セリ 其柱等ハ小ナル丸木以テ作レリ 四ツ谷丸太ノ様ニ美ナルモノニ非ス 屋根ハ桧ノ葉ノ如キモノヲ以テカヤ葺ノ如ク作りタリ 此邊路傍ニ草ノ様ナ木ノ様ナ其葉ハ細クシテ長ク葉ノ

フチニ針有り而衆葉束ネタルガ如ク一ツ所ヨリワントヲエタリ 余初メテ見聞セリ 此競馬ノ入口ヨリ籠ヨリ下
リ遅々歩シテ墓所ニ至ル 到レバ其風日本ノ公園地ノ如クニシテ樹木雜植松アリ 蘇鐵アリ 其樹間ニ墓アリ
而此ノ處ニ植エタル樹木ハ余ノ未ダ夢ニモ見ザル者多シ 而カモ尤モ奇ト云可キハ夏ノ草花多ク咲キタリ 第一
櫻草又葵ノ如キ葉ニテ桃色ノ一寸櫻ノ如キ花ヲ咲ク草日本天神ノ市ナドニ澤山有ル者也 其他名ヲ知ラザル草花
等コト咲キタリ 蜜柑ノ木ノ花咲キタルモアリ 松樹等綠ヲ爭フ中ニ又此ノ紅色ヲ交ヘ夏ト冬ト一度ニ來リタ
ルガ如キ心地ス 又モウソウチク位ノ竹ニテ縦ニシマアル者有リ 又鹿兒島ニテヘゴト云草アリ 其葉一本ノ長
サ二間斗ニ至ル 而幹長ク地上ニ出テ始ト蘇鐵ノ如キ風ヲ爲ス 余此ノ墓地ヲ徘徊スルノ間奇妙美麗ヲ云ヒツマ
ケタリ 又一ツノ奇談アリ 今夜當地在留陸軍士官三浦氏（此ノ人ハ平田氏 大迫氏等ト同ジク士官校ニ在リシ人ニシテ
十年戰爭ニモ出デラレタリシ由 又楠公ノ墓前ニ於テ衆人ト寫シタル寫眞アル由ナリ 此段ハ無用ナレドモ一寸千田嘉吉兄ニ申
上候 若シ寫眞デモ有之候得バ御覽ナサル可ク候）ト共ニ三人連ニテ食事ヲ爲サント食事室ニ至リ三人机ヲ圍ミテ坐
ス 此ノ三浦ト云人ハ髮及ヒ服ニ至ル迄皆支那風ニ變ジ言語ヲ交エザレバ其日本人タルヲ辨スル能ハズ 已ニ昨
日日本領事館ニ於テ始テ對面ノ日橋口氏支那人ナラント思ヒ其能ク日本語ニ通ズルヲ云フ 其人答テ曰ク 我日
本人ナリ 於是余モ亦始メテ其日本人ナルヲ知ル 然ルニ今夜食事室ニ入ルヤ外人亦其支那人ナルヲ思フ 亭主
ラシキ白人來リ曰ク 支那人此ノ處ニ於テ食スルヲ得ズ 此ノ言タルヤ支那人ヲ入ルレバ他ノ客ニ失敬ニナル由
ナリ（此ノ食事室ハ一机ニ四人ツ、ノ者數十アリ而今夜モ多人數食事ヲ爲シ居タリ） 橋口氏大聲叱シテ曰ク 彼ハ日本人
也 非支那人 白人去ル 此時衆客皆何事ナルカト思ヒヤ此ノ方ヲ見タリ 又直ニ黑人來ル 此ノ黑人ハ甚ダ
黒クアラス 白人ニ類ス（當地ニハ日本人ニ甚タヨク似タル人多シ 併シ言葉ヲ聞ケバ外國人ナリ 是レ即チ黑人ト白人ノ
アイノコ也ト云） 此人ハ當家ノ幹事ノ如キ者ト見ヘタリ 橋口氏ニ謂テ曰ク 彼レハ日本人ナリト雖モ服變ズ故
ニ支那人ノ如シ 當家ニ於テ支那人ヲ此室ニ入ル、ヲ禁ズルハ規則也 請フ他室ニ行カン事ヲ 橋口氏曰 規則

ナレバ止ヲ得ズ 故ニ共ニ俱ニ此ノ室ヲ去リ他室ニ到リ食ス 黑人拙者等ノ去リシヲ甚ダ氣ノ毒ニ思ヒシト見エ
色々小使ニ指揮ヲ爲シソコツナカラシムルガ如シ 而シテ又來リ謝シテ曰 英人ハ自己ニ驕ル 實ニ只今ノ事ハ
實ニかなしき次第ナリ 橋口氏答テ曰ク 心配スル勿レ 此一事ヲ以テ支那人ノ權利ヲ失フ又見ル可シ 我領地
ヲ取ラレ其所ニ來住スル旅宿ニ行キテモ常人ト同室ニテ食スルヲ得ス 長嘆息ノ至リナリ 三浦氏曰ク 船ニ乘
スルモ支那人ハ上等ニ乗ル事ハ出來ズト 諸君ヨ勉哉

二月十一日附 香港發信 父(清綱)宛 封書

寸紙謹呈仕候 益御安康之筈奉大賀候 私儀海上無事八日午前七時當地に安着仕候間乍憚御休神可被下候 扨
テ船中ハ萬事直右衛門様御世話ヲ以テ都合宜敷七日間中等室ニテ起臥仕候 着港スルヤ直ニ領事館ニ至リ書記生
平都氏^カ之案内ヲ以テホンコンホテルト名クル旅店ニ止宿仕候 同夜領事館ニ於テ日本料理之馳走有リ 昨日ハ東
京壽し本日ハ鹿兒島壽し之馳走有リ候 當地ハ日本ニ近キニ依リ日本之物ニハ不自由無之候 此ノ香港ト申處ハ
櫻島ヨリ少々大ナル島ニテ市街等ハ美麗ニハ無之候得共皆三四櫓也 通路ハ大抵阪也 是山麓ニ家屋ヲ建築セシ
如キ處ナルヲ以也 委細ハ寫眞ニテ御一覽可被下候 此地ニテ第一ノ驚愕ハ八日橋口氏ト斷髮セシ處其賃金八十
錢餘九十錢計^{但シ}一八分ニテ實ニ閉口仕候 清佛一件ハ未ダ戰場之様子無之由ニ御座候 當港ニハ佛軍艦數個定泊
致し候 領事町田氏ノ話ニ廣東ニ於テハ彭玉麟ト云大將砲臺等ヲ築キ軍備ヲ爲ス由 此ノ彭玉麟ハ主ニ戰家ニシ
テ衣食ヲ飾ラズ極テ質朴ナル人也ト云 町田氏ハ小生等着セシ時ハ廣東ニ行シ旨ニテ不在 二三日前歸館セラレ
シ故氏ノ話ハ實說ニ可仕候 先ハ安着御報迄 早々 頓首

父上様 下ノ父上様 叔父様 平信

清輝拜

三月二十一日附　　パリ發信　父宛　封書

寸紙拜呈仕候　益御清適奉大賀候　次ニ私二月十二日香港出航　海上至極平穩數所港ヲ經テ本月十五日無事マルセイユ港ニ着　同十八日同處發　氣車ニテ同夜十一時半巴里府ニ安着仕候間御休神可被下候　兼而承リ候通り當地ハ實ニ繁華ノ地ニシテ華美ナル家屋或ハ物品等不少候　學校モ公使館書記生宇川盛三郎ト云人ニ依頼致シ候ニ付御安心可被下候　此ノ宇川ト云人ハ井田氏ノ朋友ノ由ニ御座候　先ハ安着之御報迄如此　餘附後便
父上様　平信

清輝

三月二十一日附　　パリ發信　母（貞子）宛　封書

文して申上候　ますく御きげんよくいらせられ候はづめでたしく　わたくしもそのごはますくげんきで三月十八日より十一時半ようやくこのちにこぎつけました　御あんしんくださりまし　これからどうちゆうのおはなしをいたしませう　二月十二日ほんこんをたちましておくしゆすといふふねにのりました　このふねはよこはまからのりてきたふねよりよつぽどをきなふねにてこのふねでふらんすまできました　こんどはまゑとはちがいふらんすにつくまでふねがちつともゆれずきぶんもよくめしめはじめからたべつけました　さてふねではめしは一日にどにてあさは九じはんばんは五じでしたからのちにははらがへつてめしのたびになんでもどつさりたもんした　十三日の日よりちんくあつくなりだしました　十四日の日よりなつのふくをきました　十五日にさいごんといふところにつきました　このところはおささのかわぐちのやうにながくかはをのぼるところなり　なをゑもんさんとばしやでこうゑんちやてらをけんぶつしました　そのけんぶつのうちでいちばんめづらしかつたものはしろのきです　そのしろのまわりわふたかへばかりではのながさが三げんか四げんばかり　またこのこうゑんちにはおききなとらが二ひきかつてありました　こんなものをけんぶつするときのあつさはたまた

ない あせがだら／＼／＼ひはに／＼／＼かさわもたすはちろさんのこまつた——でした このとち
のやつはみちをあるきながらなにかむしや／＼／＼くつています それゆゑはわまつくろになりちようどはぐろ
をつけているようです このくつているものわきのはにしろきおしろいのようなものをぬりそれになにかのこな
をつゝんでたべるのなり このところにはとまりそうなやどやがなかつたからふねにかゝりました かゝりがけ
にみづちややによりましたらかべやてんじやうにはやもりがべつたりついていました 十六日こゝよりしつば
ん 十八日しんがぼるにちやくしました このところにつくと十二三より二十四五ぐらいのくろんぼがちいさき
ふねのりてきました これはぜにをうみのなかになげるとすぐにとびこんでそのぜにをとるのです ちやうど
ゑのしまでゑびやあわびをとるのゝやうでした なをよんさんとりくにあがりこんやはほてるどべいといふやど
やにとまりました 十九日しつばん 二十四日ころんぼといふところのちやく このところはおしやかのぼうず
がうまれたところなり なをよんさんとばしやでてらけんぶつにいきました きいろいきものをきたぼうずが三
にんばかりいました ほとけはちやうどにつぼんのにおなじもの これはこのとちのやつのがたをつくりたる
ものです これからてらなんどにいくのはおやめなさい ころんぼをおがむとおなじです ろやるほてるといふ
やどやにとまり二十五日はまたばしやでほう／＼けんぶつしましたげな このとちのやつはおとこがべつこのう
くしをさしております このくにはべつこうとぞうげのさいくものがたくさんあります こんにちしつばん 三
月三日あでんにちやく こんにちはおせくではしぐちどののはつびなじ
よのおきやくさまにおちやつただろうとなをよんさんとおわさをしまし
た しかしこのところはなにこともなし なをよんさんとまたばしやで
けんぶつにでかけたり こゝであかいしやつぽをかいましてこれから
ふねのなかでしじゆうかぶつておりました こんなふうのしやほです



このあでんにてはらくだにものををりせたりくるまをひかせたりしております またまちをとるとやぎがたくさんおります またたべものなどのあるみせにはいがぶんくくじつにきたなし ばしやでとるとばしやのなかまでもはいがとんできます まことにはいのをきところです このところはあつきところであめがいちねんに十四五たびぐらいふるところでもなし それゆゑやまのしたにおゝきないけのようなみづためが十一あります これはあまみづをためておくところです 今日しつばん 八日すゑすにちやく こゝにはただちよつとどまつたばかりであがることはできず これからはかほのようなせまきところをゆくのです こゝはもとはどうれなかつたのをひとがほつてじようきせんがとられるようにしたところです そのかわりにむしのほうのようにしづかにゆくのです そうしてむかうからふねがくるとこつちのふねはとめるのです ふねがいきするときにはどつちのふねかいつぼのほうはとめていつぼのふねをとらせます そうしてよるはいかずにいすみりやというところろにふねをよせました つくとすぐになをよんさんとあがつてみました 九日あさはやくこのところをしつばんしました 十一じ十五ふんまへひとつのふねといきすりました このところはせまきところですからふねがいきするときにはいつでもよりほうのふねからみんなみてとります すぐそばをとりますからかをがよくみえます こんどのふねもとうるときにはわたくしはかどうのかんばんのたるのうへにのりみていましたらにつぼんのひとがにさんにんみゑたり これはぶんぞうさんがをりはせねかとあかめをひつぱりいつせうけんめてにみていましたけれどもみゑませんでした とうりすぎてからなをよんさんとあひましたところぶんぞうさんがあのふねにいていろくはなしをしたときゝましてさんねんせんばん かしまういきすぎたからどうすることもできずなをよんさんとまへのひにはなしをしてこんなせまきところでぶんぞうさんのふねといきあつたらよからうといつていましたらこんにちいきすりました かしあわれず さんねんくくく こんばんつくところはぼるとさいどといふところにてぶんぞうさんのふねがこんばんつくところははいすみりやといふところす ゆゑに

そんなにとふきところではありませんからなをよんさんとこじようきせんをかりてぶんぞうさんにあひにいこうとはなしをしてはやくこのふねがとまればよい／＼とおもつて一日くらしさてついてみたらこんや十一じにしつばんのよしにてじかんがすくなくいくことはできませんでした まことにざんねん／＼／＼しかたなしこれは九日の事なり 十三日いたりやといふくにのねぶるといふところにつきました こゝにはあがることはできずきれいなところのようにみゑていました なぜあがれないかといへばいまより九かつきまへにこれらびようがはやつたからといふわけだそうです こんばんこゝをしつばんしまして十五日あさ十一じ十ふんまへふらんすのうちのまるせいゆといふみなとのまへにあるちいさいしまにつきたり すぐにまるせいゆにふねをつけないのはやつぱりまへのこれらのわけさ このしまに一日おりました 十六日あさ九じ十五ふんすぎまるせいゆといふところにつきました こゝでふねはおしまい ほてるどぶちるぶるといふやどやにやどをしましてなをよんさんとぼしやではうばうけんぶつしました このところはたいへんきれいなところでいゑはたいていろくかいかしちかいでわたしたちがとまつたところはごかいめのところでしたをとるひとをみるとむしがぞや／＼／＼ぞやはつてゐるやうでありました またまちをあるくとひとがあんまりたくさんいてあるくのじやまになります ひとがみんなおしやれにておかしきことです 十八日八じ二十ふんのきしやでぱりすといふみやこにいきました このところははにつぼんのとうきやうのようなどころでせかいだいいちのきれいなところ です こゝにわたくしがおるところです この日はしゆうじつきしやにてよる十一じはんぱりすにつきました ごあんしんくださりまし ついてからまだたくさんかいてあげることがありますけれどもこんにち四じはんにゆびんがでるそうですからまづこれだけにしておきます いそいでかきましたからわからないところがあるかもしれせん なをよんさんがうちにくわしきてがみにやくしよのようがあつてかきださないからおまんさあがはしぐちどんにおちやつたときこのてがみにかいてあつたことをはなしをしてくださるやうにゆつてあげてくれとぎやることでござり

ましたよ みんなげんきでしよ あざぶのめらのこはいかゝ よつぽどおゝきくなりましたろ こんどはいそいでみんなにはてがみをあげだしませんからよろしく／＼ せんちゆうでみんなのしやしんをだしてみしましたら新二郎やおゑいさんたちのしやしんがないようですがもしやまだもらわずにきわしなかつたかとかんがへます もしのこしてありましたらおくりてください わたくしのしやしんはあとでうつしてあげます あねさんによろしく／＼／＼ あねさんのおしやしんもつてきませんでした どうかあねさんにくださるようゆつてください うちからもつてでたくすのきのぼくとうはふねにのりましたときになをよんさんのかばんのうへにのせておきましたらそれぎりなくなりました わたくしもほんこんまではよつてしまひへやよりそこにはでませんでしたからたづねることもせずほんこんについたときにおもひだしさがしましたけれどもなし しかたなし とけいを見ましたら三じはんですからまちつとかきませう さてこのちにちやくしひとばんこうしくわんにとまりよくじつ十九日ぶんぞうさんのふたばんかみばんおとまりなさつたやどやにとりました またこうしくわんのうがわといふひとがせわをしてくれましてよきがつかがあるそうです 一三日のうちにがつかにはゑりますけれどもまだしません このちでおかしきものはひとのしやれなり くわしきことわぶんぞうさんにおきゝなさい このしやれにはなをよんさんもびつくりなされたよふすなり わたくしわみんながきれいなようすをしてわたしにみせるとおもつてせけんをあるきます いゑはきれいまちはきれいひとのようすわきれい よきけんぶつなり こつちのやつはせうぐわつきぶんとみへ申候 まいにちこうゑんちなどにあそびにばしやにてゆくものがないへんおゝし さくじつなをよんさんとこうゑんちけんぶつにいきました すいぶんきれい こつちのかしやしやのかざとりはみんないふくのたかぼうし むまはりつばなこゑたむまにてにつぼんのようなやせごろのちいさきむまはみろとおもつてもなし ばしやは一じかんが四十銭 てつどうばしややのりあいばしやはどこまでゆいても六銭なり このふたつばしやにはにかいができております にかいのほうにのるとやすし さくばんな